

東京・春・音楽祭2020

Trio Accord ——

白井 圭 (ヴァイオリン)、門脇大樹 (チェロ)、津田裕也 (ピアノ)

ベートーヴェン ピアノ三重奏曲 全曲演奏会 I



## 曲目解説

ベートーヴェンのピアノ三重奏曲

ピアノ三重奏曲 変ホ長調 Wo0.38

ピアノ三重奏曲という分野におけるベートーヴェンの習作とも言える作品で、故郷のボンを離れてウィーンに移る前の20～21歳の頃(1790-91)に作曲されたと推定されている(出版はベートーヴェンの死後の1830年)。

3楽章構成で、第1楽章アレグロ・モデラートは、若書きならではの伸びやかな楽想が心地よい。第2楽章は、しっとりとしたスケルツォ楽章。第3楽章ロンドでは、後年のベートーヴェンをも予感させる気分の盛り上がりを見せる。

ピアノ三重奏曲 第1番 変ホ長調 op.1-1

ベートーヴェンの記念すべき作品1(1795年出版)には、3つのピアノ三重奏曲が含まれている。その劈頭を飾る本曲は、1794～95年の作とされる。

4楽章構成で、第1楽章アレグロはソナタ形式。若きベートーヴェンの明るく、優雅な旋律を堪能できる。第2楽章アダージョ・カンタービレはロンド形式。まずピアノ独奏で第1主題が静かに奏され、やがてヴァイオリンへと受け継がれる。第2主題はヴァイオリンとチェロの対話となり、官能的なまでに美しい緩徐楽章となっている。第3楽章のスケルツォはベートーヴェンらしい充実した楽章で、冒頭の主題を各楽器が目まぐるしく繰り返す。トリオでは、弦が伴奏にまわり、ピアノが可憐なメロディを奏でる。第4楽章フィナーレはソナタ形式で、軽快に駆け回る躍動感が感じられる。

ピアノ三重奏のためのアレグレット 変ロ長調 Wo0.39

1812年に作曲された単一楽章の作品で、ベートーヴェンの友人ブレンターノ夫妻の娘で、ピアノを巧みに奏でたというマクシミリアーネ(当時10歳)に捧げられた(出版は1830年)。ロンド形式で、メロディは素朴だが、各楽器がバランス良く掛け合う。

ピアノ三重奏曲 第5番 ニ長調 op.70-1 《幽霊》

1808年に作曲された作品70は、2つのピアノ三重奏曲からなる。この年は、

交響曲第5・6番が完成しており、ベートーヴェンの創作意欲が横溢していた。

3楽章からなり、ソナタ形式の第1楽章アレグロ・ヴィヴァーチェ・エ・コン・ブリオは、いきなり第1主題のユニゾン強奏で始まる。主題後半にふと香る詩情が心を打つ。第2主題は、ヴァイオリンとチェロがユニゾンで音階をなぞり、ピアノがリズムを刻む。第2楽章ラルゴ・アッサイ・エデスプレッシオーヴォは、展開部のないソナタ形式。一転して幻想的で陰鬱な雰囲気となり、終始、霧のなかをさまようような不安定な気分が続く。「幽霊」の呼称は、この楽章の印象からきているとも言われている。そして第3楽章プレストはソナタ形式。それまでの雰囲気を吹き飛ばすような晴れやかな楽章である。コーダは弦のピツィカートに始まり、ダイナミックなピアノの躍動感が華やかさを添えて、最後はフォルテッシモで力強く終わる。